

はかなき肉体

——中世中期における教皇の死の表象

藤崎 衛

1. 教皇の横臥像

ローマから北へ 70 キロメートルほどに位置する都市ヴィテルボで、教皇クレメンズ 4 世（在位 1265～1268 年）は死去した。この頃、神聖ローマ皇帝権との対立などのために教皇たちはしばしばローマを離れていくつか別の都市に宮廷を構えざるをえず、ヴィテルボもその一つであった。クレメンズの墓は教皇の遺志にしたがってこの都市のドミニコ会の教会に設けられたが、19 世紀後半になるとサン・フランチェスコ教会に移された。1944 年、この墓は第二次世界大戦時にもなう爆撃を受けて破損するが、修復されて現在にいたっている。墓に横たわる¹教皇の彫像は、イタリアにおいて確認できるもっとも古いものとみなされ、また故人の彫像を見せつける初めてのものであるといわれている²。

彫像を見てみると、頬はこけ、眉間には皺が刻まれ、口をゆがめている。そこには美しさはなく、やつれた表情からは老齢と死の現実が伝わってくる（図 1）。

クレメンズ 4 世が死去して 3 年近くの空位期間を経たのち、次に教皇として選ばれたのがグレゴリウス 10 世（在位 1271～1276 年）である。この教皇は 1276 年にアレツォで死去し、その墓棺はアレツォの司教座聖堂に残されている。ここでも、教皇の彫像はこけた頬や多数の皺が老齢の教皇



図1 クレメンス4世横臥像、ヴィテルボ、サン・フランチェスコ教会
出典:A. Paravicini Bagliani, *Le Chiavi e la Tiara*, Roma 2005²。

図2 グレゴリウス10世横臥像、アレツツォ、司教座聖堂
出典:A. Paravicini Bagliani, *Le Chiavi e la Tiara*, Roma 2005²。

を写実的に表現しており、およそ65歳で死去した教皇の「そのままの」表情をかたどっているといえる³ (図2)。

これらの像が示すリアリズムは、単に彫刻技術のみに帰されるべきではない。全キリスト教会のかしらであり使徒ペトロの後継者にしてキリストの代理人たる教皇であっても、その肉体は老化と死からのがれることはできないという観念が、この像を生み出す背景にあったといえよう。そして教皇の横たわる像を見る者に、教皇の肉体のはかなさを強く印象づけたに違いない⁴。

ところで、クレメンス4世やグレゴリウス10世の時期は、死後の世界についての思想に関してきわめて重要である。というのも、この頃に、煉獄が教義化されるからである。特に注目すべきは、グレゴリウス10世が開催し

た 1274 年の第二回リヨン公会議である。そこでは、洗礼を受けたのちに罪を犯した者が真に悔悛する者で、罪の償いを果たす前に死んだ場合には、死後、浄罪的あるいは浄化的刑罰によってきよめられる、ということがはっきりと定められた。そしてこの煉獄の教義化には、クレメンス 4 世とビザンツ皇帝との間の書簡のやり取りという前提があった⁵。亡くなった教皇が一個人として彫像にかたどられることになる背景には、このような煉獄の教義化という状況があったといえるだろう。

さらに、遺骸を前にした死者のためのミサの挙行という慣行が、教皇個人の遺体像が作成されるにあたってのより具体的な背景としてあったと考えられる⁶。1286 年に作成され、ただちに流布したといわれているフランスのマンド司教ギヨーム・デュラン（在位 1286～1296 年）による『典礼用聖具』（*Rationale divinatorum officiorum*）が定めるところでは、死者のためのミサは「遺骸を前にして」（*praesente cadavere*）執りおこなわなければならなかった⁷。ギヨームとクレメンス 4 世はともに南フランス出身であって、またマンド司教になる前、ギヨームはクレメンスによって教皇庁の礼拝堂付司祭や聴取判事に任じられたほか、第二回リヨン公会議にあたりグレゴリウス 10 世に同伴している。

以上を考えあわせると、老齢と死を写實的に表現しているクレメンス 4 世やグレゴリウス 10 世の彫像は、教皇の死について考察するうえできわめて示唆的であるといえるだろう。

2. 死すべき教皇

教皇も死すべき一人の人間であるという考えは、当然ながら、いま述べた 13 世紀に限られるものではない。教皇の身近で、現世厭離（*contemptus mundi*）の風潮⁸や、教皇も一人の人間としては塵にすぎず死ぬ運命にあるという自覚は、ずっと前から存在していた。この点について、11 世紀以降の状況をたどってみよう。

ペトルス・ダミアーニ（1007 年頃～1072 年）は、教皇アレクサンデル 2

世宛の書簡で教皇の死について論じたが、彼はその結びにおいてこう述べている。

ですから人はこの世の境遇の秩序など小さなものだとみなすべきです。また、人があらゆるものを用いることができると考えるとしても、それは自分にではなく創り主の恩寵に帰すべきです。[中略] 肉体の活力はもはや乾いたほこりであると考えべきです。[中略] 厳格な最後の審判を恐れるべきです。地上の被造物の間で秀でていとみなされる者は、自らの創造主の法にしたがう限りにおいて、天上の栄光の中で真に崇高なのです。

およそ一世紀後となる12世紀半ば、クレルヴォー修道院長ベルナルは、自らの弟子ともいえる教皇エウゲニウス3世（在位1145～1153年）に宛てた『熟慮について』において、自分がいかに卑しく死すべき存在であるかを自覚するようにうながしている。ベルナルは教皇に「ところであなたは何者でしょうか」と問いかける。エウゲニウスの存在は誕生によって与えられたものであるが、教皇職に就いている現在の状態は身分の変化によってもたらされたものである。それは存在そのものが変化したということではない。現在はローマの司教（教皇）であるとしても、生まれながら司教だったわけではなく、位が後に授けられたにすぎない。ベルナルによれば、人間性という先天的なものと教皇の位という後天的なものどちらが本質かという、それは前者である。「あなたが一人の人間として生まれ、今も人間であるということ、これこそがもっとも重要なことであって、私が考察するようにと特にあなたに勧めているのはこの点なのです。」

しかしベルナルの勧めはこれで終わらない。

あなたが人として生まれたということを考えるだけでなく、どのような者として生まれたかという点についても考察する必要があると思います。[中略] あなたは生まれたとき、教皇冠をいただいていたでしょうか。そ

のとき数々の宝石で輝き、絹の着物で身を包み、羽毛や金で飾られていたでしょうか。これらすべてのものは空を通り過ぎ、一瞬のうちに消え去る朝もやのようなものではありませんか。もしあなたのすばらしい考察が虚栄の幕に穴をあけ、惜しげもなく切り裂いてしまったら、あなたの前に現れるのは、裸で、弱々しい一人の人間、貧しく、惨めな人間、しかも自分の境遇を悲しみ、裸の姿を見て恥ずかしさにふるえ、この世に生まれたこと、生きてることさえも嘆く一人の人間にすぎないことに気づかれることでしょう。人が生まれたのは誉れのためではなく、¹⁰ 労苦のためなのです。

のちにインノケンティウス 3 世（在位 1198～1216 年）として教皇座に登ることになる枢機卿ロタリオは、『人間の悲惨な境遇について』という作品を著わした。同書の中でロタリオは人生のはかなさ、むなしさ、さまざまの罪を嘆き、戒めている。その中で、彼はペルナル同様、人間は塵にすぎない存在であり、地上の栄光がいかにもむなしなことであるかをさまざまな観点から説いている。一例をあげれば、最初の章では次のようにある。

人間は塵と泥と灰からできており、さらに悪いことには、最も不潔な精液から造られる。彼は肉欲と、激しい情欲と悪臭を放つ放蕩の中で身籠られ、一層悪いことには、罪の汚れの中で孕まれた。また、彼は苦勞、恐怖、悲嘆に苛まれるために生まれ、さらに悲しいことに、死ぬために¹¹ 生まれたのである。

以上から明らかなおおり、11 世紀から 12 世紀にかけて、教皇の周囲でこの世の栄光のむなしさや人間のはかなさは繰り返し説かれていた。特にペルナルは直接教皇に対して、教皇であつても人にすぎないのだということを、はっきりと語った。

このペルナルは、『熟慮について』に先立ち、教皇エウゲニウスが即位した直後に教皇に宛てた別の書簡でも同様のことを述べているが、そこでは

教皇の在位期間の短さについて興味深い警告がみられる。

とはいえ、どのようなことをする場合にも、あなたがひとりの人間にすぎないということを忘れないでください。また、いかに偉大な人のいのちでも、まことにはかないものだということを思い起こしてください。いかに多くのローマ司教たちが短期間のうちに世を去っていったことでしょう。この点についてはあなたご自身、自分の目で確かめたことです。あなたの先任者たちはつぎのような無言の警告をあなたに与えているような気がするのです。「あなたの務めの終わりも早晚訪れますし、その日はおそらく遠い先のことではないでしょう」と。事実、かれらは自分たちの在位期間が短かったがゆえに、あなたのときもそれほど長くは続くまいと警告しているのです。わずか一日の栄光の輝きの中で、終わりの日のことを考えることは、あなたにとって常に新しい黙想の資料になることでしょう。なぜなら今、あなたはかれらの後を継いで教皇座につかれたのですが、やがてまたかれらの後に従って墓に下るようになることは、火を見るよりも明らかなことだからです。¹²

エウゲニウス3世自身は8年4か月の間在位したが、その直前の教皇ルキウス2世は11か月、さらにその前の教皇ケレスティヌス2世は5か月だけしか在位していなかった。教皇は多くの場合高齢で即位するため、世俗の統治者に比べて在位期間が短いというのは自明である。したがって、ベルナルがわざわざ発した教皇への警告は、単に在位期間の短さというより、むしろ教皇位に就いてからの存命期間の短さであると読むことができるだろう。このことは、上述のペトルス・ダミアーニのアレクサンデル2世宛の書簡からも知ることができる。

ペトルスの書簡は、その書き出しの言葉にしたがうなら、なぜ教皇の治世は短いのかという教皇自身がペトルスに対して投げかけた問いへの返答として書かれたものである。

私の理解が正しければ、以前確かあなたは私に熱心にたずねました。教皇の位は長続きせず短期間のうちに終わりの日を閉じてしまう理由が私にどう思われるのかと。およそ5年 [25年] の間司教であった使徒聖ペトロの後には、その後のどのローマ教皇もこの教皇在位期間に及ばないほどで、最近はその位の極みに上がって4年半またはせいぜい5年を超える者もほとんどない程度だということですから。このことを考えるに、まさに言われているとおりですが、われわれの知る限りにおいて全世界の他のどんな教会にあってもこのように短い存命期間が強いられるということは見出されないわけですから、これは途方もなく驚くべきことです。しかし、われわれに思われるところでは、人類に死への恐れを突きつけ、地上の生の栄光がいかに蔑むべきものであるかをまさに栄光のみ国において明らかに示すということを、天の裁きのこの命令が定めるほどまでに、¹³ 神の摂理の奥義が死すべき者たちに啓示されているのです。

このように、ペトルスによれば、教皇の寿命の短さは神の摂理によるものである。そしてそれは人々に死に対する恐れを呼び起こし、地上の栄光がむなししいものであることをはっきりさせるのである。

したがって世俗の君主らはさまざまな死因にさらされるため、聞く者たちの心は彼らの死については恐れを抱きません。ところが教皇の命については、その自然な死は法によってのみまっとうされるのですから、彼のこの世の生からの移行は大きな恐れなしには聞かれないのです。さらに地上の君主たちは、言われているように、それぞれ自分の王国の範囲内に限られているのですから、世界の他の地域のために彼らの死が広まる理由はありません。ところが教皇は、彼だけが全教会の普遍的な司教であるわけですから、光を奪われる時、彼の死は地上の全王国のために広まります。そして太陽のごとく——というのもそれだけが光り輝くのですから——もし日食がはからずも続くならば、世界全体は至るところで暗闇にならねばなりません。それゆえ教皇がこの生から離れる時——

彼は世界においては一人なのですから——諸王国の遠くの空間まで彼の死の名声は駆け巡ります。そして崇高でただ一人の人物の死が特別の恐るべき召命の終りに心底驚く者たちを混乱させるのは必定です。全能の神がローマ教皇の命をどれほど人々の教化に役立てようとされるか、またその死を諸国民の救いに用いると定めたかは銘記されなければなりません。彼が活着している間は彼は多大な熱心さにもとづいて諸々の魂の利益のために専心しなければならず、また彼の死はその創造主に人間たちの魂を呼び戻すものとして定められています。¹⁴

教皇の死は世俗君主の死とは異なり、教皇の死は全世界に知れわたる規模のものである。このようにペトルスは世俗君主と比較しつつ、教皇の比類のなさを主張している。¹⁵地上において世俗の君主たちは多く存在するが、太陽がただ一つしか存在しないように、教皇はただ一人である。そのため、教皇の死は日食にたとえられている。したがって人々にとって、教皇は死すべき人間であるとしても、敬意を払う対象であることに変わりはない。

3. 衣を剥ぎとられる教皇の遺体

教皇は時として、死後埋葬のためにまとっている衣服を奪い取られるという目に遭った。これはどのようなことを意味するのであろうか。いくつかの事例をあげてみよう。¹⁶

インノケンティウス3世は、すでに述べたように、教皇に即位する前に『人間の悲惨な境遇について』を著していた。1216年7月インノケンティウスはペルージャで死去したが、それからまもなく、アッコンの新任司教ジャック・ド・ヴィトリが教皇の遺体を目の前にした。彼はある書簡でこう述べている。

それからペルージャの町に到着した。そこで死去してまだ葬られていない教皇インノケンティウスを見出した。人々は彼がまとめて葬られる高

価な衣服を奪い去った。彼の遺体はほとんど裸ですでに腐りかけて教会に置かれていた。だが私は教会へ入り、いかにこの世の栄光が短くまたむなしいかを自らの目で知った。¹⁷

年代記作者サリンベネが報告するところでは、1254年にナポリで死去したインノケンティウス4世（在位1243～1254年）の遺体は、惨めな仕打ちを受けていた。その報告によれば、教皇が死去するさいのならわしのおり、インノケンティウスは藁の上に裸のまますべての者から見捨てられて残されていたという。そしてフランシスコ会のドイツ人修道士二人がいて教皇に次のように語ったとのことである。

確かに主なる教皇よ、私たちは何か月とこの地に黙って立っていました。あなたが話しかけ、あなたから私たちの事柄についておなじになるのを望みつつ。しかしあなたの門衛たちは私たちがあなたの姿を見られるよう入るのを許しませんでした。今や彼らはあなたを保護しようとしていません。なぜならもはや彼らはあなたから何も得ることが期待できないからです。しかし私たちはあなたの体を洗いました。¹⁸

ここで深く論じる余裕はないが、上の記述には教皇たちのフランシスコ会に対する態度が背景にあり、教皇の遺体が冷遇されているように描かれているのは、フランシスコ会に好意的であったインノケンティウスが反対派によっていかに敬意を払われなかったのか、そしてフランシスコ会だけが遺体を丁重に扱おうとしたのだということを示そうという意図があったと考えられている。¹⁹ 死去した教皇が実際に「藁の上に裸のまますべての者から見捨てられて残されていた」のかは定かではない。むしろ教皇の伝記によれば、「フランシスコ会士、ドミニコ会士それに他の多くの修道士たちや在俗の聖職者たちは亡くなった父の棺台のそばで夜を過ごし、賛美と祈りをささげて死者のわきにいた。²⁰」この記述はサリンベネの報告と矛盾している。しかしいずれにせよ、教皇の遺体が見捨てられるような状況がありえ、それが事実

として書き記されたということがここでは重要である。

11世紀にさかのぼると、明らかに略奪行為がなされようとしたことがわかる。レオ9世は1054年に死去したが、その伝記によれば、死去する日の朝、すべての聖職者たちがサン・ピエトロ教会に集まった。そこには瀕死の教皇とその棺までもが運び込まれたという。

朝方、すべての聖職者たちが慣習どおりに使徒聖ペトロの教会にやってきた。[教皇は]朝にそれがなされると、大理石でできた彼の棺を教会に運ぶよう命じた。そしてそれがなされると、彼がそこで横たわる寝台を教会に運ぶよう命じた。ローマの人々は棺が教会に運び込まれるのを見た時、みながみな、ラテラノ宮になだれ込んだ。例のごとく宮殿を略奪するためである。しかしいとも聖なる司教の功德がかくも大いなるものだったので、だれ一人として宮殿の回廊に入り込むことができなかった。それを見たローマの人々はみな、恐れを抱き大いに恥じ入って退却した。²¹

898年のローマ教会会議の決定は「冒瀆はなほだしい慣習」を糾弾し、将来にわたって教会および皇帝の処罰をもって厳かに禁じた。というのは、教皇の死後、人々が総大司教館を略奪するのみならず、ローマ市全体および周辺地域で悪行を繰り返すだけでなく、さらにそれぞれの司教の死にさいしてその所有物が強奪されるという慣行が広まっていたからだとされた。²²

以上から次のように述べることができるだろう。繰り返される禁令や、慣例 (consuetudo, solere, mos など) という言葉が示すとおり、死去した教皇はしばしば遺体にまとっていた衣服を奪われたのは事実である。ただし、それは物欲に発する略奪行為としてのみ理解されてはならないであろう。むしろ聖遺物の獲得が動機であったという可能性を考慮すべきである。実際、595年7月のグレゴリウス大教皇のもとのローマ教会会議の決定は、死去した教皇を墓へ運ぶ棺台に覆いをかけてはならないと定めた。それまでは教皇の遺骸は高価な典礼服で覆われており、人々はこの典礼服を聖性に対する畏

敬の念から (pro sanctitatis reverentia) 分かち合うためにそれを引き裂いたという不当な慣習 (mos ultra meritum) が起きていた。²³ 奪われる側の教会としてはそれを禁じざるをえないだろうが、奪う側の根拠としては、必ずとはいえずとも、敬虔な宗教心も想定することができる。

略奪をこうむって着衣を剥がされてしまった教皇は、裸に近い状態で残されることになった。ジャック・ド・ヴィトリの報告するインノケンティウス3世も、サリンベネの報告するインノケンティウス4世も、裸同然で安置されていたとされる。そしてジャック・ド・ヴィトリは教皇の体が腐りかけていたということまでも語っている。

4. 「かくしてこの世の栄光は去りゆく」(Sic transit gloria mundi)

—麻くずを燃やす儀式—

教皇の人間としてはかなさは、教皇庁における儀礼の中でも表現されることになる。このことについて考えてみたい。

ドミニコ修道会士エティエンヌ・ド・ブルボンは、1250年頃から彼の没する1261年までの間にまとめた民衆教化に用いるための説教例話集(エクセンプラ exempla)の「死の記憶」という章において、麻くずを燃やす儀式について述べている。そこでは6世紀前半にアレクサンドリア総大司教を務めた慈善家として知られる聖ヨハネスが取り上げられている。

「施与者ヨハネスについて」 総大司教となったこの施与者ヨハネスは自らの墓を未完成のままにさせておいたが、大いなる祝日にある人物を定め、その者は総大司教の名誉ある場所にいるさいにこう言わなければならなかった。「陛下、あなたの墓は未完成です。それを完成させるようお命じください。なぜなら『いつ盗人[死のこと]がやってくるか』はおわかりにならないからです」。²⁴

同様の話は1260年代にヤコブス・デ・ヴォラギネが集成した『黄金伝説』

の第 27 章でも取り上げられる²⁵。ところが聖人の事績を眼目とする『黄金伝説』には出てこない教皇の即位のさいに麻くずを燃やす儀式についての一節を、エティエンヌは直後に付け加えている。

同様に教皇が聖別され至高の榮譽に高められる時、彼の目の前で麻くずが燃やされ彼に向ってこう告げられる、「このようにこの世の栄光は去りゆくのです (Sic transit gloria mundi)。あなたは灰であり死すべきものだということを思い起こしてください」と。²⁶

教皇の即位に関して麻くずを燃やす儀式が言及されるのは、これが初めてのものだといわれている²⁷。そして実際に教皇の即位にさいしてこの儀式がおこなわれていたということを否定する根拠をわれわれはもちあわせていない。ただし、教皇の即位式とは別の機会に、すでに 11 世紀以降、西欧カトリック世界においてこの種の儀式がおこなわれていたという証言がある。

すなわち、11 世紀の時点ですでにフランスのブザンソン大司教ユーグ 1 世 (在位 1031 ~ 1066 年) が降誕祭、聖ステファノの祝日 (12 月 26 日)、復活祭、聖霊降臨祭にこの儀式をおこなっており、13 世紀にはリジューでも聖霊降臨祭におこなわれていたことが知られている²⁸。

また、上述したペトルス・ダミアーニによる教皇アレクサンデル 2 世宛の書簡 (1064 年) の最後で、ペトルスはビザンツ皇帝の戴冠式にさいして麻を燃やす儀式があったことを伝えており²⁹、その知識は教皇宮廷において共有されていたであろうと考えられる。

12 世紀前半においては、教皇自身もローマでこの儀式をおこなっていたようである。サン・ピエトロ大聖堂の参事会員ベネディクトゥスの『政治の書』(1140 ~ 1143 年頃) によれば、降誕祭と復活祭にさいしておこなわれる教皇の行列行進 (プロセッション processio) にあたり、教皇はサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂を訪れ、その内陣に入る時、聖堂管理人から差しだされる火をともしられた蠟燭のついた長い棒を受け取り、大聖堂入口の柱頭³⁰に吊るされた麻くずに点火するということである。ただし、この儀式は教皇

自身の死を想起させるためのものではなく、ベネディクトゥス自らが述べる
とおり「世界の終わり」(finis mundi) を表現するものであるとされた。

麻くずへの点火は世界の終わりを表象するためのものではあったが、ビザ
ンツ皇帝の即位儀礼における慣行と同様に統治者であつてもはかなく死ぬ運
命にあるのだという意味を込められて、遅くともエティエンヌが説教例話集
をまとめた 13 世紀半ばまでには教皇の儀礼に取り込まれていたということが
できるだろう。

教皇がサン・ピエトロ大聖堂で戴冠するにさいして麻くずが燃やされる儀
式が史料上明確になるのは、15 世紀初頭になってからのことである。ウス
クのアダムの年代記が報告する 1404 年のインノケンティウス 7 世の戴冠式
やヤコポ・ダンジェロの書簡から知られる 1406 年のグレゴリウス 12 世の
戴冠式がそれである。³¹

これまで検討してきたことを踏まえると、次のように整理することができる。
1064 年のペトルス・ダミアーニの書簡で言及された時点では、ビザン
ツ皇帝の戴冠式で麻くずを燃やす儀式があったという慣例が紹介されている
ということから、この頃にはまだ教皇庁において教皇の戴冠式にさいしてど
ころか、のちにベネディクトゥスの『政治の書』(1140～1143 年頃) で定
められる降誕祭と復活祭におけるサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂での
麻くずを燃やす儀式がおこなわれていたとは考えにくい。

この儀式が有した含意に関してもまた、13 世紀半ばのエティエンヌ・ド・
ブルボンの言葉が画期的である。つまりこうである。それまでは、11 世紀
半ばのペトルス・ダミアーニも、そして 12 世紀半ばのベネディクトゥスも、
史料上、教皇個人の肉体や教皇個人の権威の有限性について語っているの
ではなく、むしろ、その儀式はこの世が滅ぶべきものであるということの象徴
として可視化するものであるとされていた。実際、ペトルスによれば、ビザ
ンツ皇帝の目の前に担当の人物が両手で提示するもののうち、片手にある死
者の灰は皇帝自身が灰にすぎず、その命がはかないものであるということ
を認識させるものであり、もう片方の手にある燃える麻くずは最後の審判に
さいしてこの世界——ペトルスの別の言葉を用いれば「彼 [すなわち皇帝] が手

にするもの」——が滅びるさまを認識させるものであった。また後者ベネディクトゥスによれば、この儀式は「火により世界の終わりを表すため」のものであった。つまり、二人にとって、燃える麻くずは最後の審判を経て滅ぼされるこの世界を表現するものであって、教皇あるいは特定の人間の栄光のむなしさや肉体のむなしさを表現するものではなかった——ビザンツの儀式では死者の灰の方がそれを表していた——。ところが、13世紀半ばのエティエンヌの説教例話集では、麻くずが表現するのはこの世における栄光であるとの考えが表明されており、そしてこの考えが染みこんだ説教が托鉢修道士たちによって広められるようになっていたのである。教皇の即位にさいして新教皇に投げかけられるとされた言葉はこうであった、「このようにこの世の栄光は去りゆくのです (Sic transit gloria mundi)。あなたは灰であり死すべきものだとすることを思い起こしてください」。この時点において、麻くずが象徴するのは、ペトルスやベネディクトゥスにとってはそうであったような滅ぶべき物質的な世界全体というより、むしろ「この世の栄光」(gloria mundi) であった。そして「この世の栄光」とは、物質的な豊かさを含意することはあるとしても、それはあくまでも付属的であり、むしろローマ教皇という職位が体现していたカトリック的キリスト教世界における最高の権威と権力を何よりも意味していた³²というのは議論の余地はあるまい。その最高の職位に就くための儀式でいわれる言葉だからである。

5. むすびにかえて

最後に、冒頭で取り上げたヴィテルボのクレメンス4世の墓に立ち戻ろう。そこには次のような碑銘が残されている。

読む者よ、歩みを止め、狭い住まいがどれほど教皇クレメンス4世を窮屈に閉じ込めているか驚くがいい。見よ、ペトロの後継者にして相続人は灰に帰した！ もしあなたが彼を記憶するならば、あなたはこの世の愉しみを求めないだろう。[中略] 彼はかくも崇高で、その上かくも燦

然と輝き、位をまっとうし、天にまで高められたと考えられている。キリストの 1268 年が経ってクレメンスはこの墓に納められている。それゆえここを通るあなたは聖者らに心から祈りなさい、彼に最後の日の至上の喜びを与えるようにと。アーメン。³³

また、クレメンス 4 世の死からおよそ 10 年後に没したニコラウス 3 世 (在位 1277 ~ 1280 年) の墓碑銘には次のようにある。

この世は燦然たる太陽の大きな食を耐えた、無慈悲な死があなたを奪った時に、ニコラウス、聖なる教皇よ。[中略] 教会は輝き、祖国は安らぎ、ローマはほほ笑んだ。熱意は悪徳を押しえつけ、誠実を育てた。そのようにわれわれからあなたを、むごい死はあなたを奪い去ったのか？

悲しいかな、あまりにも大きな損失！ とはいえ無益ということはない。実に死というものが恐るべきものだということをあなたの死は教える。

[後略]³⁴

ペトルス・ダミアーニの書簡やニコラウス 3 世の墓碑銘のたとえによれば、教皇は太陽であり、教皇の死は日食である。しかし、全教会のかしらであり太陽のように輝かしい存在であるとしても、教皇は死ななければならず、その肉体は滅びる運命にある。墓碑銘や物故した教皇の像を彫る行為は、朽ちるべき肉体をもつ個人としての教皇の人間としてのはかなさを代弁している。だが教皇の死は、キリスト教徒にとって、人が死すべきものであるというこれ以上ない教訓ともなる。そして教皇の死はまたさらに別のことも教える。教皇は死んでも教皇職は永続するということである。

クレメンス 4 世にわずか数年先立つ二代前の教皇アレクサンデル 4 世 (在位 1254 ~ 1261 年) は、1259 年 8 月、亡くなった教皇と枢機卿たちのすべての記憶を毎年 9 月 5 日に祝わなければならないと定めた。この追悼の日、教皇と枢機卿は荘厳ミサを執りおこない、貧者に施しをすべきということであった。³⁵ その背景には教皇がしばしば宮廷をローマの外に構えなければなら

ず、ローマにある先任者たちの墓所を訪れる機会が少なくなってしまったという事情があるが、集団としての教皇や枢機卿たちの記憶が生み出され強化される契機になったという点において注目に値する。またこの定めは教皇職の連続性を意識化させることにもなったということも考えられる。この定めと実際の典礼は、代々の教皇たちに連なるものとしてその時の教皇がいるのだということを、自他に認識させる機会となったであろう³⁷。

本稿で確認した限りにおいても11世紀のペトルス・ダミアーニ、12世紀のベルナルドやロタリオなどにみられる、教皇であっても塵や灰にすぎないという観念、そして13世紀半ばに確認できる、教皇の即位にあたって麻くずを燃やして「かくしてこの世の栄光は去りゆく」と唱えられるという証言などから、教皇も一人の滅ぶべき人間にすぎないという認識が広く共有されていたことは明らかである。教皇の死は、世俗の統治者とも、また各地の司教など聖職者や一般のキリスト教徒とも異なる独特の地位を教皇が占めていたことを明確なものとするのであった。その地位とは、「この世の栄光」という表現が示す、中世中期において理念的にも現実的にも教皇が獲得した比類なきキリスト教世界の統治者としてのそれであった。

■ 註

- 1 クレメンス4世の墓がたどった詳しい経緯については次を参照。A. M. D'Achille, "Il monumento funebre di Clemente IV in S. Francesco a Viterbo," in *Skulptur und Grabmal des Spätmittelalters in Rom und Italien. Akten des Kongresses «Sculptura e monumento sepolcrale del tardo medioevo a Roma e in Italia» (Rom, 4.-6. Juli 1985)*, ed. J. Garms & A. M. Romanini, Wien 1990, pp. 129-142.
- 2 I. Herklotz, «Sepulcra» e «Monumento» del Medioevo. *Studi sull'arte sepolcrale in Italia*, 2001² Napoli, pp. 205, 238-248.
- 3 アレッツォのグレゴリウス10世の横臥像については次を参照。G. Bardotti Biansion, "Il monumento di Gregorio X ad Arezzo," in *Skulptur und Grabmal, cit.*, pp. 265-273.
- 4 むろん教皇のみがこのような老齢や死に顔のリアリズムの対象だったわけではない。このアレッツォの聖堂には同じ時期つまり13世紀後半に作製された司教の横臥像も

あり、教皇のそれと同種のリアリズムを見て取れる。ただし本稿は、キリスト教世界にあって特別な地位を占めていた教皇に焦点を絞る。

- 5 ジャック・ル・ゴッフ『煉獄の誕生』渡辺香根夫、内田洋訳、法政大学出版局、1988年、425～428頁。
- 6 これについては、ケルナーの次の二つの文献を参照。煉獄の教義化についても言及がある。H. Körner, "Praesente cadavere. Das veristische Bildnis in der gotischen Grabplastik Italiens," in *Die Trauben des Zeuxis. Formen künstlerischer Wirklichkeitsaneignung*, ed. H. Körner, C. Peres, R. Steiner & L. Tavernier, Hildesheim – Zürich – New York 1990, pp. 41-60; *idem*, "Individuum und Gruppe. Fragen nach der Signifikanz von Verismus und Stilisierung im Grabbild des 13. Jahrhunderts," in *Die Repräsentation der Gruppen. Texte – Bilder – Objekte*, ed. O. G. Oexle & A. von Hülsen-Esch, Göttingen 1998, pp. 89-126, 特に pp. 113-114.
- 7 *Guilelmi Dvranti Rationale divinatorum officiorum*, ed. A. Davril & T. M. Thibodeau, 4 vols., Tvrnholti 1995-2000, Book 5, p. 100.
- 8 教皇周辺に限らず 11 世紀から 12 世紀にかけての現世厭離 (contemptus mundi) について論じたものとしては、次の文献がある。M. Sot, "Mépris du monde et résistance des corps aux XI et XII siècles," *Médiévales* 8 (1985), pp. 6-17.
- 9 *Die Briefe des Petrus Damiani*, ed. K. Reindel, vol. 3, München 1989, p. 200 (nr. 108).
- 10 Bernardus Clavarensis, *De consideratione*, in *S. Bernardi Opera*, ed. J. Leclercq & H. M. Rochais, vol. 3, Romae 1963, pp. 17-18. 日本語訳は、聖ベルナルド『熟慮について』古川勲訳、中央出版社、1979年、69～72頁より引用。
- 11 ロタリオ・デイ・セニ『人間の悲惨な境遇について』瀬谷幸男訳、南雲堂フェニックス、1999年、18頁より引用。
- 12 *Patrologia latina*, ed. J.-P. Migne, vol. 182, Parisiis 1862, coll. 430-431. 日本語訳は、聖ベルナルド前掲書、18頁より引用。
- 13 *Die Briefe des Petrus Damiani, cit.*, pp. 189-190.
- 14 *Ibid.*, pp. 191-192.
- 15 これについては、11 世紀半ばのペトルス・ダミアーニの関わったローマ教皇庁がまさにグレゴリウス改革の始点に位置していたことについても想起すべきである。
- 16 以下の事例については、次を参照。R. Elze, "Sic transit gloria mundi. Zum Tode des Papstes im Mittelalter," *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 34 (1978), pp. 1-18. この論考は同じ著者の次の論文集に収められている。*Päpste – Kaiser – Könige und die*

- mittelalterliche Herrschaftssymbolik*, ed. B. Schimmelpfennig & L. Schmutge, London 1982. またオーラーの著書の次の個所は、このエルツェを参照している。ノルベルト・オーラー『中世の死——生と死の境界から死後の世界まで——』一條麻美子訳、法政大学出版社、2005年、136～140頁。
- 17 *Letres de Jacques de Vitry*, ed. R. B. C. Huygens, Leiden 1960, pp. 73-74 (I, 61-67): Post hoc veni in civitatem quam Perusium nuncupatur, in qua papam Innocentium inveni mortuum, sed nondum sepultum, quem de nocte quidam furtive vestimentis preciosis, cum quibus sci[licet sepeliendus] erat, spoliaverunt; corpus autem eius fere nudum et fetidum in ecclesia relinquerunt. Ego autem ecclesiam intravi et ocul[us] fide cognovi quam brevis sit et vana huius seculi fallax gloria.
- 18 Salimbene de Adam, *Cronica*, ed. G. Scalia, Bari 1966, p. 608.
- 19 A. Paravicini Bagliani, *Il corpo del papa*, Torino 1990, pp. 183-188. なお同書には *The Pope's Body*, Chicago-London 2000 として英訳があるほか、仏訳、独訳もある。
- 20 Nicolaus de Carbio, *Vita Innocentii IV*, ed. F. Pagnotti, *Archivio della reale società romana di storia patria* 21 (1898), p. 119 (cap. 42).
- 21 A. Poncelet, "Vie et miracles du pape S. Léon IX," *Analecta Bollandiana* 25 (1906), pp. 258-297, p. 290. Cf. J. M. Watterich, *Pontificum Romanorum qui fuerunt inde ab exeunte saeculo IX usque ad finem saeculi XIII vitae*, vol. 1, Leipzig 1862, p. 172.
- 22 *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*, ed. J. D. Mansi, vol. 18, Venetiis 1773, col. 226 (capitulum 11).
- 23 *Gregorii I papae registrum epistolarum*, ed. P. Ewald & L. M. Hartmann, vol. 1, Berolini 1891, p. 364.
- 24 Stephanus de Borbone (Étienne de Bourbon), *Tractatus de diversis materiis predicabilibus*, ed. J. Berlioz, Turnhout 2002, p. 302 (prima pars, titulus VII, capitulum 7).
- 25 ヤコブス・デ・ウオラギネ『黄金伝説1』前田敬作、今村孝訳、平凡社ライブラリー、2006年、327頁：

聖ヨハネスは皇帝の戴冠式るとき、石工の親方が皇帝たちの前にすすみ出て、皇帝に色のちがう四、五個の大理石片を見せ、「陛下は、どのような大理石あるいはどの金属で陛下の墓碑をつくるようにお命じになりますか」とたずねるのが慣例になっているという話を聞いた。そこで、ヨハネスも、生きているうちに墓碑を用意させたが、最後の仕上げはさせないでおいた。そのために、大き

な祝いごとや慶事があって彼の司祭たちが集まるようなとき、いつも彼らの二、三人が彼のまえに行って、こう言わなくてはならなかった。「総大司教さま、あなたの墓碑は、まだ仕上がっておりません。どうか完成させるようにお命じください。と申しますのは、いつ盗人がやってくるか、こればかりは、あなたご自身にもおわかりでないのですから。」

- 26 Stephanus de Borbone, *Tractatus*, cit., p. 302.
- 27 Paravicini Bagliani, *Il corpo del papa*, cit., p. 32.
- 28 *Ibid.*, p. 28 および n. 94.
- 29 *Die Briefe des Petrus Damiani*, cit., vol. 3, p. 200.
- 30 降誕祭におけるこの儀式については次のように定められている。 *Le Liber politicus de Benoît*, in *Le Liber censuum de l'Église romaine*, ed. P. Fabre & L. Duchesne, 3 vols., Paris 1889-1952, vol. 2, p. 145 (nr. 17). 復活祭の場合についてもほぼ同じ文面である。 *Ibid.*, p. 153 (nr. 47). なお、次の文献にも言及がある。甚野尚志「ローマ教皇の即位儀礼——中世盛期における定式化——」『幻影のローマ——〈伝統〉の継承とイメージの変容——』歴史学研究会編、青木書店、2006年、245頁。
- 31 Paravicini Bagliani, *Il corpo del papa*, cit., pp. 35-36.
- 32 A・パラヴィーチーニ・バリアーニはこの主題に多大な貢献をなしたが、ペトルス・ダミアーニやベネディクトゥスの『政治の書』にみられる麻くずを燃やす儀礼が教皇の人間性や権力のはかなさを表現するものであったと考えている。本稿筆者は、この点に関しては見解を異にする。 Cf. *Ibid.*, pp. 28-30.
- 33 M. Guardo, *Titulus e tumulus. Epitafi di pontefici e cardinali alla corte dei papi del XIII secolo*, Roma 2008, p. 53:

Lector, fige pedes, admirans quam brevis aedes
pontificem quartum Clementem contegit arctum.
En datur in cineres Petri successor et heres!
Cuius si memor es, non mundi gaudia quaeres.
Hic iudex primum: quem sic successus opimum
reddidit ut, fertur, miles probus efficeretur.
(.....)
Sic sublimatus, sic denique clarificatus,
perficiendo gradus censetur ad astra levatus.

Annis sex denis octo cum mille ducenis
transactis Christi, Clemens tumulo datur isti:
Aghios quare, qui transis, corde precare,
ut finalis ei dent gaudia summa diei. Amen.

34 *Ibid.*, pp. 76-77:

Nostra tulere gravem praeclari Solis eclipsim
saecula, cum rapuit mors impia te, Nicolae,
Papa sacer, (.....)
Splenduit Ecclesia, requievit Patria, risit
Roma, vigor vitia reprimens promovit honesta.
Siccine te nobis, te mors subtraxit amara?
Heu nimium iactura gravis! tamen haud sine fructu:
mors tua quippe docet quam sit mors ipsa timenda.

35 *Liber censuum, cit.*, vol. 1, p. 585.

36 M. Borgolte, *Petrusnachfolge und Kaiserimitation. Die Grablegen der Päpste, ihre Genese und Traditionsbildung*, Göttingen 1995², pp. 203, 340.

37 Cf. Paravicini Bagliani, *Il corpo del papa, cit.*, p. 202.

■ 付記

本稿は平成 20 年度笹川科学研究助成の成果の一部である。

(ふじさき・まもる グローバル COE プログラム特任研究員)

The Transitory Body: Images of the Papal Death in the High Middle Ages

Mamoru Fujisaki

The *gisant* of the pope Clement IV is considered the most ancient monument conserved in Italy with the plastic reproduction of the dead figure. Its realism was due to the concept that even popes cannot escape from aging and death, and this was told to those who saw the transitoriness of the papal bodies. Behind this realism would be the establishment of the doctrine of purgatory and the practice of the mass for the dead.

Before the thirteenth century, the concept that even popes are only human being to die was already emphasised by for example Peter Damian's letter to the pope Alexander II, the *De Consideratione* of Bernard de Clervaux, and cardinal Lothario, the future pope Innocent III. Damian and Bernard also discussed the brevity of the pontificate. According to Damian, the brevity of the popes' life is of divine providence and the pope's death, as a solar eclipse, evoke people's fear of death. He says that the Roman pontiff is unique in the world in contrast with plural kings who reign over limited territories.

His death was instructive evoking the fear of death and the transitoriness of the human being, but his body was sometimes a target of depredation. Jacques de Vitry saw Innocent III's cadaver almost naked and recognised how vain the glory of this world was. In fact, from the early Middle Ages people plundered the precious clothing from dead popes not only from avarice but also from pioussness aimed at obtaining relics.

Popes themselves could be conscious of their transitory life and vanity of

temporal glory. In the middle of the thirteenth century at earliest, a band of flax, a symbol of transience, was burned before the eyes of the pope and the sentence “Sic transit gloria mundi” was said on the occasion of the papal enthronement. “Gloria mundi” might mean the papal authority in the Western Christianity rather than temporal richness. Thus we can confirm the uniqueness of the papal authority from the point of view of the papal death.